

言葉において理解されるべき自己の所在

—英語の自己表現—

広島大学大学院 柳 瀬 陽 介

1. はじめに

「英語による自己表現」が提唱されるとき、問題なのは、英語表現であり、それさえ沢山覚えればコミュニケーションは成立すると簡単に考えられてはいないだろうか。少なくとも現行の英作文の教科書の多くは、単なる文法構文集、あるいはトピック別例文集に過ぎないようにも思える。この考えをやや単純に図式化するなら、次のようになる。

自己+英語表現=コミュニケーション

しかし、言語において理解されるべき自己は、言語から独立して存在しうるものであろうか。言語というのは、上で表したように、はたして裸の「自己」の上に着用する、取り替え可能な洋服のようなものなのであろうか。本論は、この点について考察し、「英語の自己表現」について若干の提言をすることを目的とする。

2. 言語・生活・自己

今世紀初頭の哲学者ウィトゲンシュタイン(1889-1951)の後期言語論の注目すべき点の一つは、言語をあくまでも人間の営みの中でとらえようとしたことである。彼は「言語と言語の織り込まれた諸活動との総体」を「言語ゲーム」と呼び⁽¹⁾、言語を話すことは「一つの活動ないし生活様式の一部である」⁽²⁾ことを明確にした。言語は、それが使われる営みの中で、はじめて意味をもつのであるから、私たちは、その営み(生活様式, *Lebenform*, a form of life)を理解しなければ、言語も理解できないということになる。ウィトゲンシュタインは、全く見知らぬ伝統をもった異国へ行ったときには、仮にそこでの会話が(例えば電訳機などで—筆者注)わかったとしても、行われていることは、ある人にとっては依然として謎でありうることを述べた後に、象徴的にこう述べる。「もしライオンが話ができるとしても、私たちはそのライオンを理解できないだろう⁽³⁾」。

実際、英語と日本語といった、相互理解が比較的進んでいると考えられる言語間においても、理解の不成立は多くみられる。佐藤首相の「前向きに善処します」発言は有名な例であるし、筆者の経験からしても、筆者が最初にディベートに接したときは、どうして、必ずしも自分の信念でないことを、口角泡飛ばして論争するのか理解できなかった。筆者がディベートを理解したのは約2年後であったが、その時には筆者もディベートにつききっていた。(あるいは、その行為に浸ることこそが、その行為を理解することなのかもしれない。)また、ある地方自治体の公報誌を英訳した時、筆者の訳は、一文一文としてはともかくも、全体を通して何を言いたいのか皆目見当がつかないとあるイギリス人に言われて閉口した覚えがある。時に耳にする英語教室での”Stand up. Bow.”という集団行動にしても、AETには異様なものに写るのではなかろうか。

このように、言語と生活—ここでいう生活とは、英語でいう’life’と同じように、人生、暮し方、生き方といった意味も含めたものである—は、渾然一体となったものといえる。では、ある人の「自己」と言語・生活の結び付きはどうなっているのであろうか。

例えば、現社会に不満を感じ、頭髪を染めて改造車を乗り回している若者がいるとする。彼は、自分の車の進路に人がいる場合、いつものように眉をひそめて、ガムを噛みながら、こう言えるだろうか「すみません、少々脇へよってもらえませんか」。おそらく通常のイントネーションを使って、この若者が上のように言うことは不可能であろう。これを彼が言うためには、

彼は少なくともしめつけ面をやめなければならない。自らの反社会的な姿勢を崩さずに上のような言葉遣いをするのは不可能である。

また、人は憤懣やるかたない、あるいは皮肉をこめたイントネーションなしで「私の考え違いなかもしれないけど、ひょっとしてあなたの方に落度があるのではないかしら」と言って激怒することはできない。不快な朝も、他人に対して半ば義務的に微笑みをもって挨拶を繰り返しているうちに、いつとはなしに、気がなごんでいくことも私たちは時折経験する。

言語・生活・自己は、ひとつだけ抽出することが不可能なぐらいに互いに紡ぎあわされたものといえよう。言語・生活を離れた自己など考え難い。テーゼ的にまとめるならば、「あなたは、あなたの言語である」というわけである⁽⁴⁾。

人は言葉によって育まれる。'Mother tongue'という言葉が示すように、子供は親の言葉を自らのものとする。子供は、さらに読み、聞く言葉で新たな世界を知り、その言葉の使用によって、その新たな世界を自らのものとする⁽⁵⁾。言語と生活が、同時に互いを創り出すわけである。自己とは、その統一体のことではなからうか。自己と言語は決して別物ではない。

3. 言語・思考・情操

思考・情操といったものも、言語と分かち難く結び付いているといえよう。思考(Gedanke, thought)と、言語を話す(sprechen, speak)⁽⁶⁾こととの関係⁽⁷⁾について、ウィトゲンシュタインは「子供はただ話すことを学ぶのか、あるいは考えることも学ぶのか。子供はかけ算の意味を、かけ算するよりも前に学ぶのか、あるいは後に学ぶのか。⁽⁸⁾」という形で問題提起する。私たちは、とにかく「思考するということは、思考の表現とは別におこなわれ、それとは本質的に違った過程なのだ」という考えにとらわれる。しかし、一方「かけ算を紙に書いてするとき、それはかけ算の考えと並行して行われているのかどうか、ということの問題にする人はいないだろう⁽⁹⁾」と考えられる。かけ算の思考をすることは、まさにかけ算を(紙に書いて)することと違ってよい。したがって、これと同じように、私たちは、まさに話すことによって考えるのだといっても別段奇異ではない。

それでも、思考と言語は別だと主張する者に、ウィトゲンシュタインは強烈な思考実験を提唱する。

次のことをやってみよ。まず、例えば「今日はすばらしいお天気だ」という文を言う。

それから今度はこの文の思考内容を考える、ただし文なしで、純粹に、である⁽¹⁰⁾。

もし、「言語とは、思考という歌詞につけられたメロディーのようなもの」といった比喩が示すように、思考と言語が本来別々のものならば、上の文の思考内容を、私たちは言語とは無関係に「純粹に考える」ことができるはずである。しかし、この思考実験の結果はあきらかである。私たちは、ある言葉に触発され、話しはじめ、今度はその自分の言葉に導かれつつ、話し続ける。言語に導かれ私たちは話す。その話された軌跡こそが思考ではなからうか⁽¹¹⁾。

ある人の言葉遣い・語彙は、その人の知的生活を露呈さえもする。あらゆる人を、「善人」か「悪人」かのどちらかに片付けてしまおうとする人の人間理解が、深くはないことは、容易に推測がつく。的確な言葉遣いは、その人の観察眼の正しさを表す。

また私たちは、すぐれた文章に出会ったとき、その表現によって、今まで自分の奥にうごめいていた名状し難いものに、はじめて光明をあてられた思いをする。言語の力によって私たちは、より深く自分を理解する。言語は、私たちの知的生活の大きな推進力である。

私たちは、言語を「教え」られることによって、同時に思考することを「教え」られる⁽¹²⁾。言語の限界が、思考の限界である。そして、言語・思考の限界は、しばしばメタファーや、新造

語といった言語の拡張によって越えられる。直感的なひらめきにしても、その啓示が「話され＝考えられ」ることによって、はじめて「思考=Gedanke, thought」となるのである。

また、思考だけでなく、情操⁽¹³⁾も言語によって基礎づけられる公共的なものであるといえよう。落ち着いた言葉遣いをする家庭で育った子供は、その落ち着きを自分の人格の一部とするだろう。

ある意味で、情操も「教えられる」ものである。例えば、「名月をとってくれろと泣く子かな」という句があるが、天空に浮かぶ月を「欲しい」子供は、その周りの大人のおそらくは困惑した微笑などによって、「欲しい」という言葉の使い方を学ぶであろう。そういった経験の繰り返しによる言葉の学習が、「欲しい」という言葉によって導かれた情操を自らのものとする過程ではなかろうか⁽¹⁴⁾。

こうして、自己は言語において規定されていること、またその言語とは公共的・社会的なものであることを鑑みてみると、言語で表された自己の「意味」の決定は、発話者だけによってなされるのではないということが帰結する。聞き手もまた、発話の「意味」決定に必然的に関与するのである。

われわれがひとたび一定の言語行為を他者に向かって遂行するや、その行為は私自身にとっての<外部>となり、他者の理解と評価の眼差しにさらされ、もはや私の<内部>に回収することは不可能となる。理解や評価の権利は聞き手、つまり他者の手に握られているのであり、後から<意図>を持ち出してみても、それは手遅れだと言わねばならない。「そういうつもりじゃなかった」、「それは誤解だ」という発言は私の<意図>の訂正ではなく、新たな言語行為の遂行である。<意図>は私の内部にあるのではなく、具体的な言語行為の中にしか現れない。むしろ聞き手―他者は「誤解する権利」をもつのであり、その誤解＝応答を通じて私の<意図>は私自身にとってもまた明瞭になるのである⁽¹⁵⁾。

言語によって理解されるべき自己は、あなたの内部にあるのではなく、言語社会のなかで「他者の理解」に翻弄されるあなたの言語において立ち現れると言えよう。

4. 外国語を話すということ

あなたはあなたの言葉であり、その言葉の意味の決定は、他者にも委ねられているという考えは、「共同体」における母語使用の時にはともかくも、「社会」における外国語使用の時には、ことさらに忘れてはならないことではなかろうか。ここでいう「共同体」、「社会」の使い分けは、柄谷行人によるものである⁽¹⁶⁾。それによれば、「共同体」とは言語ゲームを共有する閉じられた領域であり、「社会」とは共通の言語ゲームを前提としえないような他者と出会う場所である。したがって、在日期間が長く、日本事情に通暁した英語話者と日本人の会話、あるいは日本人同士の英語での会話は、英語「共同体」のなかでの出来事であろうし、ある会議で席を同じくしたポーランド人、インドネシア人、オーストラリア人と日本人の英語での交渉は英語「社会」での出来事だといえよう。そして、教育現場では英語「共同体」的会話練習が盛んであるようだが、現代の英語教育に求められている―あるいは求められていた―のは、英語「社会」における英語使用なのである。共通の言語ゲームが期待できない英語「社会」では、自分のこの思いは、きっと相手にも通じるはずだという一方的な思い込みは通用しない。あなたは、英語という公共的な言語に託された限りにおいて理解される。

例えば、日本語で「欲望」を学んでも、それは必ずしも英語では通じない。英語では、I wish/h/I'd like to/I should like to/I want/I wanna/I wonder if...etc, etc, といった言葉によ

って「望む」。「事実と反する望み」、「控え目ながらもかなえたい望み」、「ある意味でかなえられて当然とも考えられる望み」、「明快な欲望」、「強引なまでの欲望」、「正の可能性に賭けたい望み」等等、これらの語の差異・綾を学ばない限り、私たちは英語社会の中で、適切に「望む」ことすらできないとさえいえよう⁽¹⁷⁾。

思考についても同様に、日本語の思考が、そのまま英語の思考につながるわけではない。「pであると思う」ことひとつにしても、それはthinkするのか、believeするのか、あるいはassumeかsuspectするのか、それとも、ただpと述べるのかといった、英語によって与えられた選択肢＝語彙・文法に従って、私たちは英語で考える。また、その命題pの中にあるかもしれない不定冠詞も、それはただ可算名詞につけるアクセサリーではなく、ものをどう捉えるかという認識の問題である⁽¹⁸⁾。それらの差異をわからずに、いたずらに言葉を乱用するなら、その話者は早晚誤解を受けるであろう。

語順の相違も、深刻なのかもしれない。自分の言いたいことをすべて頭の中で日本語でととのえた後に、それを翻訳して発話する話者は、発言のタイミングを逸する。いや、それ以上に、最初に発話の骨子を明確に述べ、それから細部にわたるといって自体、ひとつの英語の思考パターンである。このパターンに従わない発話は、要領を得ないものとされるだろう。英語を話すということは、英語という言語に導かれて考えることなのである。

また、日本語共同体では普通に「慎み深い」人も、英語社会では、「信じ難いほど自分に対して無関心な、おそらくは頭の回転の鈍い」人となるかもしれない。外国語を話すとき、私たちは、母語で培った生活態度がそのまま通用すると期待することはできない。私たちの視点からすれば、私たちは島国日本で英語を学んだのだから、英語は「外国語」に過ぎないのかもしれないが、人種の差なく、母語話者でなくても、ごく当然に英語を話すことを期待されている「英語社会」においては、日本人の話す英語は、もはや「外国語」ではない。こちらからすれば、いくら「なれない外国語」であれ、言語の公共的な性格からして、発話されるや否やその意味解釈はその言語と聞き手に委ねられる。

あるいは、強硬な「日本英語」論者、「英語国際語」論者なら、外国語として英語を話す日本人は、直訳的英語で良いと主張するかもしれない。しかし、どんな者も一方的に言葉の使用・理解を押し付けることはできないし、またそれを試みるべきでもない（教科書検定の「進攻」、ウォーターゲート事件の'inoperative'にみられる一方的な言語使用を思い出されたい）。英語は、あくまでそれが使われる「英語社会」のものである。したがって、国境を越えて英語が使用される現在、英語は、英米人の専有物ではなくなってきたものの、日本英語はあくまでも結果であって、目標とすべきではないと筆者は考える。

「あなたは、あなたの言語」――言語使用において、あなたの言語を離れた「真のあなた」というものはない。あるいは、聞き手の方に、話し手は、馴れない外国語を話しているという自覚があれば、誤解は生じにくくなるといえるのかもしれないが、誤解が消滅することはない。筆者はある時、日本へ来たばかりの、中国人と数回会う機会をもった。すべて中国で学んだという彼の日本語は、文法的にみて全く問題のないものだったが、筆者にとっては、彼の言葉遣いは慇懃無礼とも思えるほど丁寧なものだった。その後彼に会う機会のない筆者にとって、「本当の彼」が、非常に丁寧な人なのか、それともただレジスターを把握していなかったのかは不明のままである。筆者にとって、「真の彼」とは、彼の言葉が表したものに他ならない。

言語において理解されるべき自己は、その話者の言葉に立ち現れる。自己は話者の内部に所在しない。そして、このことは原則として、外国語を話す私たちにも仮借無しに当てはまる。私たちは自分の言葉に責任をもたねばならない。

5. 英語教育への示唆

以上の考察から、とても「自己+英語表現=コミュニケーション」といった無邪気な考えを抱くことはできないことがわかる。自己を不問にして表現だけに専念することはできない。そして、その人の自己を創りあげるのは言語である。英語における自己表現には、英語における自己確立が必要である。

こうしてみると、英語テキストの選択が、文法・語彙といった言語材料の面だけからなされるのは、不十分極まりないといえよう。私たちは、言語によって培われてゆくのであるから、テキスト選択はこのほか重要となる。目指すべき英語の知的生活に近づくような題材を選び、それになかった言語行為の学習をしなければならない。教師がテキストと共にもたらす言葉が、学習者の「英語の自己」を創る素材なのである。

まがりなりにも、英語で自己を確立するためには、日本語の読書体験に準ずるぐらいの読書量が必要であろう。おそらくは、全訳されることを前提として計画された、現行の多くの教科書は、この量の点においても失格であると思われる。そして間違っただけではないのは、言語による自己確立とは、母語に対応する「言語表現を覚える」ことではなく、「言語に導かれて話す=考える」ことを学ぶことなのである。

テキストを使う際に、4技能を分割することはできない。学習者は、読み、聞いた言葉に触発され、話し、書く。他者への表現という試金石を経て、自己を築く。外国語という自由にならない言葉と格闘し、新しい自己を築くのは、ずいぶん苦しいことではあるが、その困難な営みこそが、学習者に外国語を自らのものにすることを可能にする。逆に言えば、その格闘なしに、日本語の自己の上に単にかぶせただけの「英語のあなた」は、英語社会成員に、理解される以上に誤解されるであろう。

英語表現活動のひとつである書くことも主体的な行為である。「こよみのうえではもう春だが、朝晩はまだ寒い。しかし庭の木にはかわいいいつぼみがふくらみはじめ、こずえにさえずる小鳥の声も、なんとなく明るい」といった文人趣味の和文英訳は、学習者の「英語の自己表現」には、とうていつながり得ない。

自己表現は「お前は何者か。何をどう考えているのか」という問いが、切実なものとして迫ってくるときにのみ有り得るものだろう。問いかけのないところに表現はない。その意味で、英作文は、読者を揺り動かすテキスト読解に続くのが自然であろう。また、表現すべき「内容」を、予め一括して日本語で与えておく、和文英訳自体、採点の容易さといった点以外取柄のない、自己表現とは関係のない教育手段といえよう。自己のコミットメントのない和文英訳は、試験者の想定している「受験英語例文」を、いかに受験者が組み合わせることができるかを試す、ぎこちない儀式にすぎないように思える⁽¹⁹⁾。

およそ凡庸で通俗的な内容の和文の英訳ばかり練習した後の、「英語の自己表現」は、自己不在の無個性的な言葉の羅列にしかかなりえないのではなからうか。英語社会では、一言も発言できないが、「トピック別頻出英文50」だけは、脈絡なくスラスラと口にできる学習者がいるとしたら、少なくとも筆者にとって、彼は不気味な存在である。また、筆者は英語教師志望の大学生が、「英語合宿」で、ネイティブスピーカーを交えたディスカッションの後、英語が思い付かなかったから賛成と言ったままで、日本語だったら反対意見を述べていたのに、と述懐するのを聞いてとても驚いたことがある。現行の英語教育の優等生であり、おそらくは、その伝承者となる彼らにとって、英語表現とは何なのであろうか。

言語と自己の分離、自己不在の言語の道具化は慎まねなければならない。英語において理解さ

れるべき自己は、英語によって創られるのであるから、英語テキストの内容軽視は、必然的に英語学習者の軽薄化につながる。もし英語教育が、ホームステイ先で、会う人毎に、喜々として”Do you like apples?”とばかり尋ね続ける生徒や、いきなり見知らぬ英米人に”May I speak to you in English now?”と真っ赤な顔をして話しかけ、いざ話をせよと言われるや、目を白黒させる「英語好き」や、英語会話で学んだ表現をオウムのように場違いに、しかし流暢に口にするようにしか興味を示さないレシテーションコンテストの元覇者しか生み出さないのなら、英語教育はまさに「愚民教育」として、嘲弄されるべきであろう。

テキストの選択について考えることは、必然的に英語教育が目指すものについて考えることになる。日本語の自己に加えて、英語の自己確立をも促すということ。そしておそらくは、それに伴う日本語の自己の変容——今という時代の日本に生きる英語教師は、次世代の人間に何を施そうとしているのだろう。安直な答えを拒む問いである。唯一の正答のない問いでもあろう。しかし、教育が意図的な行為であり制度である限り、一人一人の英語教師は、この問いを回避すべきではない。

注

(1) Wittgenstein, L., (1953) Philosophische Untersuchungen, Suhrkamp. s.7 (藤本隆志訳『哲学探究』大修館書店 1976年)。

(2) *Ibid.*, s.23

(3) *Ibid.*, II xi

(4) ここで思い出されるのが、ソシュールと並ぶ記号論の祖とも称される哲学者パースの、’the word or sign which man uses is the man himself. (...) Thus my language is the sum total of myself; for the man is the thought.’ (5; 314) や ’men and words reciprocally educate each other; each increase of a man’s information involves and is involved by, a corresponding increase of a word’s information.’ (5; 313) といった「記号主義的人間観」であるが、現在の筆者にパースの記号論を本格的に論考する力量は残念ながらない。なお上の引用は Collected Papers of Charles Sanders Peirce Vol. V. (eds.) C. Hartshorne & P. Weiss. Harvard University Press (1934) による。

(5) 理解と表出の関係については、拙論『理解としてのパラフレーズ』（第28回大学英語教育学会口頭発表要綱）を参照頂きたい。

(6) ここでは、ドイツ語・英語の表現に注意したい。まず、Gedanke, thought だが、これらは、言うまでもなくそれぞれ denken, think の過去分詞である。本論でいう「思考」すなわち Gedanke, thought とは「考えられた」ものなのであり、直感的に思い浮かぶ Einfall, idea とは性質を異にするものである。次に、「話す」についてであるが、周知のように、独語の ’sprechen’ には、英語の ’speak’ 同様、’Sprechen Sie Deutsch?’ といったように、「ある言語を使う」という意味がある。ウィトゲンシュタインの引用の訳文の中で「言語を話す」とあるのは、この ’sprechen’ の訳語であることに注意したい。この語を、単に言語を音声的に産出すること、という狭い意味でとらえるべきではない。

(7) この問題に本格的に論考するためには、少なくともハッキングによって示された視点を押さえる必要があるが、ここではその余裕はない。(イアン・ハッキング 伊藤邦武 訳『言語はなぜ哲学の問題になるのか』(1989) 劉草書房 日本語版への序文——言語観の転換はいつ生じたのか—— (Hacking, Ian (1975) Why Does Language Matter to Philosophy? Cambridge University Press)

(8) Wittgenstein, L., (1969) *Philosophische Grammatik*, s.66 Suhrkamp. (山本信訳『哲学的文法-1』大修館書店 1975年)

(9) *ibid.*, s.66.

(10) *ibid.*, s.107.

(11) 本論文でいう「思考」とは、猿がバナナをとるのに道具を使ったというような、単純な知的行動のことではなく、必ずしもその場、その時のトピックに限定されずに繰り広げられる知的営みのことである。

(12) 柄谷行人 ((1986)『探究 I』講談社)における「教える」という視点に示唆を受けた。

(13) ここでは、「興奮、快・不快、怒りなどの生物的・動物的水準の感情」である「情動」、あるいは「喜び、悲しみ、不安、愛情、得意などの人間的な感情」である「情緒」よりも、「知的発達によって分化し複雑化する。つまり、教育により開発され発展・純化される可能性をもっている感情」であるという意味で、「情操」という言葉を使用した。なお以上の定義は小林利宣編『教育臨床心理学辞典』(1980)北大路書房による。

(14) 黒田 亘 ((1983)『知識と行為』東京大学出版会 p.15.)の要約は引用に値すると思われる。

正当化の文脈で言及される願望や欲求や愛好は、価値や規範から絶縁された純粹に「私的」な与件などではない。それらはわれわれの生活を律している慣習や制度との関連においてのみ発効する体験であり、すでに公共性の次元にのぼっている。ひとりの胸に深く秘められた欲望であっても、それは必ず「欲望の体系」という社会的現実から、生活の全体構造から理解されねばならない。(中略)われわれは裸の事実のなかに生きるのではなく、制度的な事実が構成する世界に生きる。

(15) 野家啓一「言語と実践」p.149 (『新岩波哲学講座2 経験 言語 認識』1985年 岩波書店)

(16) 柄谷行人 前掲書 第1章「他者とはなにか」

(17) 無論ここでいう「望む」とは、生物レベルとしての欲望(情動)ではなく、あくまでも人間社会の中における欲望(情操)のことである。

(18) マイク・ピーターセン (1988)『日本人の英語』第2章 岩波新書

(19) その他大学入試の英作文批判については、中村敬 (1989)「大学入試英語問題のイデオロギー」『英語はどんな言語か』三省堂 所収